【幼児教育支援センターによるプロジェクト報告 1.　子育て支援プロジェクト】

保育者養成校における子育て支援活動の実践について
—地域への多様な子育て支援を目指した初年度の取り組み—

The practices of Child-rearing Support Programs in ECEC Teacher Training Colleges:
First year of efforts to provide diverse Parenting support to the community

石田淳也 [1], 鈴木久美子 [2], 加藤寿子 [2], 増田啓子 [1], 富田エミ [1], 村上太郎 [1]
ISHIDA Jun’ya, SUZUKI Kumiko, KATO Toshiko, MASUDA Keiko, TOMITA Emi, MURAKAMI Taro
[1] 常葉大学保育学部　[2] 常葉大学短期大学部保育科

要旨

本稿は、常葉大学の附属機関として設置してある幼児教育支援センターにおける子育て支援プロジェクトについて、初年度の運用となった 2023 年度の活動について概要を報告する。5 つの多岐に渡る活動を行ない、多くの親子に参加していただいた。今後も大学における子育て支援活動のあり方や、保育者養成課程における学生の実践的な学びの場としての意義などについて今後も検討を重ねていく必要があると考えられる。

キーワード：子育て支援、未就園児、保護者支援、地域貢献

Ⅰ　はじめに

近年の日本では少子化や育児の孤立化などが問題とされており、国や各自治体が工夫を凝らしながら子育て支援策を行なっている。静岡市が行なった「子ども・子育て支援に関するニーズ調査（2018）」[1] によると、「効果が高いと考えられる施策または充実を図ってほしいと期待する施策（回答数 3,373）」の項目において、「経済支援」「保育料の軽減」のほか「児童館や公園等の子どもの遊び場の拡充（33.2%）」「親子で参加できる各種イベントの開催を増やす（14.6%）」等の回答がされている。また、「子育てについて日頃悩んでいることや不安なこと」においては、子どもの発育・発達（30.9%）、食事や栄養（30.2%）、接し方に自信が持てない（16.6%）などの回答がされている。この結果は 2013 年に同様に行われた調査結果に比べ、改善されている項目もあるが、まだまだ地域の保護者からは、安心して子育てを行なうことができる環境が求められている。

教育基本法 [2] 第二章第七条において「大学は、学術の中心として、高い教養と専門的能力を培うとともに、深く真理を探究して新たな知見を創造し、これらの成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする。」と記されており、保育者養成を行なっている本学は、子育てにおける知識や人材、場所や機会を地域社会へと提供することが期待されていることがわかる。

常葉大学・常葉大学短期大学部では、幼児教育支援センターが附属機関として設置してあり、保育学部と短期大学部保育科の学生を対象に、感性豊かで温かな人間性をもち、高い専門性を身につけた、

現代社会が求める「子どもと家庭を支える専門職者」になるための総合的な学生支援を行っている[3)]。2022 年度より、研究機関として地域における幼児教育支援に関する 4 つの機能（研究発信、子育て支援、有資格者研修、園･施設との連携）がプロジェクトとして立ち上がり、2023 年度より運用開始となった。「子育て支援プロジェクト」は、その機能の 1 つとして位置づけられ、地域への多様な子育て支援を企画・提供する拠点として、保育学部・短期大学保育科の教員 6 名がチームとなって構成されている。

現在、常葉大学短期大学部保育科では、子育て支援活動「とことこ広場」が月 2 回、年間 12 回開催されており、2 年生授業科目として学生も広場に参加し、保育者としての実践力を育成する場として非常に意義ある活動が長年続けられている[4)]。これらの活動は全国の大学でも行われており、保護者だけでなく学生への教育効果も期待されている[5)6)7)]。本学でも子育て支援活動の充実を図るため学部の教員も参画し、多様な活動展開を目指す。

本稿では、2023 年度に子育て支援プロジェクトとして行った活動報告をまとめ、次年度に向けたよりよい子育て支援の実践について提案を行うものである。

Ⅱ　子育て支援プロジェクトチームの実践報告

1. 親子あそび「みんなでシャボン玉を飛ばそう」（担当：鈴木・加藤）

地域の子育て家庭の親子 10 組を迎え、子ども・家族・学生がともに触れあうことのできる子育て支援活動「シャボン玉あそび」を実施した。実施の概要は以下の通りである。

実施日時：2023 年 8 月 20 日（日）10:00-11:30

実施場所：子育て支援室（芝生の庭）

対象者：未就園児とその家族

参加人数：子ども 13 名・保護者 17 名

学生スタッフの人数：5 名

【活動の様子と振り返り】

これまでに開催された子育て支援活動は、平日に実施されることが多く、子どもと母親が主な参加者であったが、日曜日開催を企画したことにより、参加家族の内 9 組は父親の参加となった。また、父親も遊びに参加しやすい機会となるよう「シャボン玉あそび」を企画し、さまざまな素材を準備し低年齢の子どもにも参加できる用具を配慮した。父親母親は、子どもと一緒に道具を工夫したり試したりして、活発に子どもとのかかわりを楽しむ様子が見られた。

図 1　シャボン玉遊び

図 2　父親と遊びを楽しむ

また今回の遊びの場は、親子のかかわりだけではなく、

図 3　暑さ対策を行ないながら

初めて出会う子ども同士のかかわりや親同士のかかわりも偶発的につなげることができ、シャボン玉を介して自然な触れ合いや対話を得ることができた。8 月の厳しい暑さの活動のなかであったが、子どもは 8 か月から 5 歳までの年齢差がありながら、自発的に遊ぶことができ充実した時間となった。

参加した保育科 1 年の学生らは、実習が未経験でありながら、子どもの動きや表情に懸命に対応し、個々に応じたかかわりを実体験することができた。また、親子のかかわりを身近に見ることは、実習においても知ることのできない貴重な体験であり、親子の表情や様子に触れ、大切な一人の子どもに寄り添うことを考える機会につながった。

活動の最後には、学生による絵本の読み聞かせを聞きながら、参加者家族が一体となって温かな雰囲気に包まれた。子育て中の母親や父親にとって、孤立した子育てではなく、身近な大学内に子育てを共に考え見守る場や人がいる安心感をもてるよう、学生の学びの場としてもさらに深めていきたいと考える。

図 4　絵本の読み聞かせ

2. 親子クッキング（担当：富田・増田）

実施日時：2023 年 8 月 19 日（土）10:00-12:00

実施場所：子育て支援室・栄養実習室

対象者：就学前の子とその保護者

参加人数：10 組の親子（保護者 13 人、子ども 13 人、乳児 2 人）

学生スタッフの人数：学生 18 名

【活動の様子と振り返り】

10 組の親子（保護者 13 人、子ども 13 人、乳児 2 人）が参加し、親子で手作りパンを作った。10 組の定員は募集と同時に定員に達し、子育て家庭のクッキングへの関心の高さが感じられた。

会場の子育て支援室を、調理の場と子どもの遊び場のコーナーを作り、参加者が待機している間や調理作業に飽きたときに、親子で遊べるよう配慮した。

参加者がそろったところで、今回は「パンダ銭湯」という絵本の読み聞かせを行い、その後のパン生地作りへ導入した。絵本の読み聞かせは学生が担当した。

図 5　打ち合わせ風景

パン生地は、大きめのビニール袋の中で材料を混ぜ、親子で力を合わせこねて作成させる。この方法で実施すると、手や周囲を汚さず、衛生的に生地作りが出来る。続いて、あらかじめ講師が準備しておいた、発酵済みのパン生地を使いパンの成型を行った。

図 6　パン生地を成型

今回は水族館の生き物をテーマに、テーブルの上で好きな形に切り、オーブンの天板に並べていく。この作業は親子で楽しく実施できるが、パンの焼成は幼児には危険なので、隣接する栄養実習室に運び、学生がオーブンで焼いたものを子育て支援室に運びもどし試食してもらうようにした。

図 7　パンの焼成

パンが焼き上がるたびに、子どもや親たちからも歓声が上がり、試食は非常に好評であった。当日作ったパン生地は自宅に持ち帰り、一晩冷蔵庫の中で発酵を行い、家庭でもう一度パン作りを楽しんで頂く。オーブンがない家庭でも、フライパンやオーブントースターで焼くことができることを伝えた。この機会が親子でクッキングを楽しむきっかけとなり、食への関心を高め、親子のコミュニケーションが深まればと考えている。

当日招聘したのは「日々のパン」という団体に所属する講師である。「日々のパン」は、日本全国の幼稚園や保育園などで、簡単に作れるパン教室を実施しており、手作りの大切さやお子さんへの愛情を伝えることを目的としている[8)]。

参加した学生は、パン生地作り、成型、焼成を手伝い、栄養実習室のオーブンでパンを焼く担当をした。さらに会場の準備・受付・子どもたちの世話や、平行して行われていた大学オープンキャンパスに来場した高校生見学者の案内などを行った。

学生は当日の活動のみでなく、今回の活動の企画・運営から参画し、子育て支援活動について考える事が出来た。さらには参加した子どもや父母と交流することができ、学生にとっても非常に意義深い経験となった。

3. こころも体もスッキリ爽快！親子体操（富田・増田）

実施日時：2023 年 6 月 10 日（土）10:00-11:00

実施場所：多目的室（ダンス室）

対象者：未就学児の子をもつ親子

参加人数：10 組の親子（20 名）

学生スタッフの人数：7 名

【活動の様子と振り返り】

草薙キャンパス多目的室（通称：ダンス室）にて、親子体操教室を開催した。定員の 10 組親子（20 名）は兄弟（姉妹）が数名追加になることを想定して設定した。

受け入れ準備では、誘導係、受付係、見守り係などの役割分担で学生を配置し、駐車場から多目的室までスムーズに来室できる様配慮した。また、会場に一角にマットを敷き乳児用スペースを確保した。

教室開始時には開催の趣旨、教室の流れを説明したあと、子どもの名前を呼び出席確認を行った。母親の膝に座った子どもたちからは、片手をあげて大きな声で返事があった。

親子体操は準備体操、その場の運動、移動系の運動、模倣遊び、ダンス、ストレッチと多様な動きを多く取り入れて構成した（表１）。

表１　親子体操の主な活動内容

1．準備体操 首：指さしを指していろいろなところを見たよ 肩：ロボットのポーズでかっこよく動かしたよ 体幹：空気を切って、かっこよく！ 抱っこしなら、体をひねっても大丈夫。 腰：左右に腰回し！タテ、ヨコ、斜めに 前屈：小さくなって～大きくばんざーい 開脚：立ったまま床タッチ。できるかな？
2．その場の運動 筋力：おせんべやけたかな？ バランス：ヒコーキ 脚力：ロケット
休憩（汗拭き、水分補給）
3．移動系の運動 器用さ：トンネル歩き 模倣　：列車でGO！ママの動きをマネするよ。 帰りの列車はママが子どもの動きをマネするよ。 だるまさんが転んだ だるまさんが踊った、だるまさんがフラミンゴ だるまさんがお相撲さん、だるまさんが忍者 ※変身していろいろなポーズをしたよ
休憩（汗拭き、水分補給）
5．ダンス Ado「新時代」で楽しくダンス
6．ストレッチ みんなで床に座り気持ちよくリラックスストレッチ

準備体操では、上部、体幹、下部の順で、遊びを取り入れながら体を伸ばした。「遊び」を取り入れることで可動域が大きくなるよう促した。体操開始時は、まだ現場になれず、母親から離れられない子どももおり、抱っこしたまま、母親が体操をする様子が伺えた。

その場の運動では、「おせんべ、やけたかな？」を実施した。これは、うつぶせになる子どもを母親がひっくり返す運動であり、親子ともに全身の筋力を要する。

図 8　ヒコーキでバランス

移動系の運動では、「トンネル歩き」と「列車で GO ！」を行った。「トンネル歩き」は親が１歩出す時に、子どもが脚と脚の間をくぐるという運動である。親は子どもの動きを観察しバランスをとりながら歩行し、子どもは四つん這いで親が足を出すタイミングに合わせてくぐることから巧緻性を養うことができる。「列車で GO ！」では、子どもは親の後ろへ回り両手を掴み、列車を完成させる。列車が出発すると、親のステップを子どもが模倣し、様々なステップを学習する。帰りの列車ではその逆を行った。子どものステップではジャンプやリズムが一定ではなくステップを自由に発想する姿が伺えた。

だるまさん転んだでは、事前にいくつかのポーズを伝えた。お相撲さんの「そんぎょ」ポーズや「フラミンゴ」ポーズはバランス感覚や筋力が養われ、ときどきよろけながらも、鬼にタッチしたあとは元気に走り出した。

親子ダンスでは Ado さんの「新時代」を流し、みんなの知っている音楽を用い全身でリズムを感じ楽しんだ。

ストレッチでは、さざ波の入りの音楽を聞きながら、リラックスストレッチをした。

本教室は子育て支援の一環として実施したものあり、親と子が肌のふれあいを通して運動遊びを行い、健康面や精神面に好ましい影響を及ぼすことの一助となることが期待された。

図 9　ダンス風景

4. お姉さんお兄さんと遊ぼう！（石田）

実施日時：2023 年 11 月 5 日（日）10:00-12：00

実施場所：子育て支援室

対象者：未就園児とその家族

参加人数：9 組子ども 10 名

学生スタッフの人数：12 名

【活動の様子と振り返り】

子どもたちが楽しく遊ぶことが出来る環境を用意することで、親子がリフレッシュすることができることを目的として行なった。事前準備において、「子どもが安心して好きな遊びを楽しみ、過ごすことが出来る環境」をテーマとし、環境構成を検討していった。ボールやシャボン玉、大型積み木などダイナミックに遊ぶことが出来るものや、障子紙によるお絵描きやままごと遊びなどを用意していった。

図 10　障子紙にお絵描き

当日は 9 時頃から子育て支援室の準備を進め、10 時ごろ 9 組の親子が来訪した。プログラムが開始されるまでは、親子で支援室に用意された環境に学生とかかわり、子どもたちは環境に慣れていき、10 時 15 分からプログラムを始め、親子体操を行なった後、保護者と子どもで分かれて過ごしていった。最初は不安な気持ちから泣いてしまう子どももいたが、学生が優しく関わり、用意した環境へ誘導しながら一緒に遊んでいく事で、気持ちを落ち着け遊び始めていった。大型積み木を建物に見立てて積み上げたり、思い切り崩したり、お絵描きでは好きな色のクレヨンや丸タックシールなどを用いて障子紙を彩って過ごしていった。プログラムは 12 時ごろ終了した。はじめは不安そうにしていた子どもも、学生と楽しく過ごし、満足そうな表情で帰っていった。

学生からの感想として大きく 2 つあった。1 つは「自分たちだけで子どもに対応しなければいけない大変さを感じた」こと。子どもが泣き続けてしまうなど、保育者の対応が必要な時、実習であれば園の保育者を頼ったり相談したりすることが出来るが、今回は学生自身で対応しなければならなかった。学

生は対応に困った様子ではあったが、どのような対応をすれば良いのかと、試行錯誤しながらかかわっていくことが大きな学びになったようであった。

2つめは「友人の子どもへのかかわりを見ることが出来た」こと。実習の際には子どもとのかかわりについて、園の保育者の姿や経験に基づく指導より多くの学びを得ることが出来る。友人は同じ学生という立場であり、実習園の保育者の様に知識や経験があるわけではない。しかし、同じ立場であるからこそ、他の実習生はどのようなかかわりをするのかという学びや、かかわりに対する不安や戸惑いは自分だけではないという安心感を得ることが出来たようであった。

今回は初めての試みということで、学生も運営することに必死になっていた。今回の経験を引き継いでいく事で、より多くの親子にとって安心して過ごす時間・空間をもたらしていく事が出来るように取り組んでいきたい。

5. 保護者のしゃべり場（村上）

実施日時：2023年7月22日（土）、11月5日（日）10:00-12:00

実施場所：子育て支援室

対象者：未就学児の子をもつ保護者

参加人数：【8組（7月）／9組の親子（11月）、計17名

学生スタッフの人数：17名（7月）／13名（11月）

【活動の様子と振り返り】

2023年7月22日(土)および11月5日(日)に、子育て支援室にて「保護者のしゃべり場」を実施した。子育て支援活動においては、親子のかかわりや遊びを促すことを軸にし、それが子ども同士、親同士の関わりに繋がっていくものが多いと考えられる。今回の活動では、保護者が色々しゃべってスッキリすることを主な狙いとした。そのため、活動においては親子分離が可能な遊びの場や雰囲気づくりを意識し、学生スタッフも保護者グループ、子どもグループと役割を分けて活動を企画していった。

図11　全体での遊び（導入）の様子

保護者グループでは、まず簡単な自己紹介やアイスブレイクを行い、2～3名の小グループに分かれ、「最近困ったこと・悩んでいること」や「最近の子どもの様子で嬉しかったこと」などを出し合ってもらい、保護者から出た語りを各グループについている学生スタッフが付箋に書き留め、模造紙に配置していった。30分程度のしゃべり場の後、各グループで出た話の内容を学生スタッフがまとめて保護者と一緒に発表を行った。グループ毎に話の方向が異なっていたものの、発表を聞きながら「あ～、分かる！」や「ウチの子も昔そういうことあった」など共感する保護者もいた。

参加した保護者からは、「いろいろなことを話すことができて良かった」「学生さんが話を聞いてくれ

て話しやすかった」といった、喋りっぱなしの場があることでスッキリしたという感想がある一方で、「子どもが初めて（自分から）離れて遊んでくれた」といった、親子分離ができたことについての感想なども挙げられた。

図 12　しゃべり場の様子

学生スタッフは、一連の活動の中で保護者グループと子どもグループの両方を経験し、保護者グループでのファシリテーションと、子どもを引き受けてしっかり遊ぶ場について学ぶ機会となったと考えられる。学生の振り返りの中では、「準備不足」「役割の明確化」など、企画を進めていく上でのチームワークなどに言及しているものも見られた。子どもや保護者とかかわるだけではなく、安心して遊ぶことができる場・安心して話すことができる場をどのように整えていくのかについて、学生自身が振り返りを通じて次の実践に繋げていくこともできるような場の重要性を確認することができた。

Ⅲ　課題と展望

2023 年度より運用開始となったとはいえ、実際の企画・運用面においては試験的な段階であることは否めず、チームとしても試行錯誤を行いながら進めていった。そのような中でも、参加申込をしてくださる保護者が少なからずいること、スタッフとして参加する学生にとっても様々な経験の場となることを鑑みると、本プロジェクトは一定の効果が見込めることが考えられる。また、各企画には父親の参加も見られた。静岡市の調査[9]において「父親が子育てにかかわりづらい理由（回答数 1,452）」では職場に関する問題以外で「父親として具体的に何をすべきかわからない（22.7%）」「子育ては女性が行うべきと考えているから（19.1%）」「男性が子育てにかかわることを特別視する風潮が世間にあるから（2.2%）」「男性が子育てにかかわることを恥ずかしいと思う意識があるから（1.1%）」などの回答がされている。父親が参加し交流しやすい機会を設け、子育てへの参加を促進していく事で、より充実して子育て支援へと繋がっていく事が期待できる。

今年度は初年度ということで、参加人数や場所を限定し、模索しながら活動を始めていった。その中で学生による運営のあり方や子育て家庭が参加しやすい活動内容、外部団体との連携や宣伝の方法など改善点が挙げられた。今後はより多くの子育て家庭の支援を行うことが出来るよう、企画や開催場所を検討していき、地域に貢献していきたい。

謝辞

ご参加くださいました保護者のみなさま、活動を楽しんでくれた子どものみなさま、スタッフとして活動を支えて下さった学生のみなさまに篤く感謝申し上げます。

注

1) 静岡市（2018）子ども・子育て支援に関するニーズ調査、調査結果報告　pp131-132
2) 文部科学省「教育基本法」（https://www.mext.go.jp/b_menu/kihon/about/mext_00003.html）,2023 年 12 月 10 日閲覧
3) 幼児教育センター HP, https://www.tokoha-u.ac.jp/facilities/student-support/early-childhood-education-support-center/, 2023 年 12 月 4 日閲覧
4) 子育て支援活動「とことこ広場」, https://www.tokoha-u.ac.jp/community/extension-course/child-care/, 2023 年 12 月 4 日閲覧
5) 柳瀬 1 洋美（2010）「大学における乳児期・子育て支援グループ活動 I ―親支援・家族支援の場としての「子育て広場」―」『東京家政学院大学紀要』第 50 号 , pp.1-12.
6) 窪田健一郎 , 玉井久美代 , 野口知英代（2021）「保育者の専門性としての子育て支援に関する研究―大学における子育て支援活動「わくわくランド」に関連して―」『大阪国際大学　国際研究論叢』34（3）pp.69-87.
7) 吉見昌弘（2009）「大学を拠点とした子育て支援活動の展開と課題」『愛知教育大学　幼児教育研究』第 14 号 , pp.81-89.
8) 日々のパン　https://hibinopan.jp/about/, 2023 年 11 月 16 日閲覧
9) 前傾 1）p.134.